

伝文

日本口承文芸学会会報
〈伝文〉第12号 1993年1月

発行 日本口承文芸学会
〒112 東京都文京区白山5-28-20
東洋大学・東洋学研究所 気付
電話03-3945-7483

トギ、トゥギのこと

野村 純一

トギ(伽)の語義はよく判らない。言葉の歴史からすれば、カタリよりは余程新しい。それでいてハナシよりは明らかに古い。しかもそれぞれに共存、併立していまに健在である。

この中、昔話伝承の場面で、トギあるいはトゥギの語が、早くにとりわけ注目を集めたのは、岩倉市郎による沖永良部島からの報告であった。そこでは島内における昔話の有力な語り手が「頼まれて病氣悔家のお伽をする」ということであった。それまでは、病人や死者の枕辺にはべって、トギもしくはトゥギの名のもとに昔話が披露されるという事例を私は知らなかった。まことに刺激的な内容であった。しかるに、その後同様の事態は相次いで発見、報告された。昔話はそのような場面で直接機能しているとすることは最早、動かし難いものになった。もっとも、これに向ける解釈と理解は、依然多岐にわたるかも知れない。しかしトギ、トゥギの場と昔話のかかわりはすでに否めない。

さて、そのときに次のような例ははたしてどうであろうか。現在杉並区に在住の佐島信子さんの経験、あるいは彼女自身の事跡とでも称せるものである。佐島さんは岩手県江刺市愛宕の出身である。昭和36年春に上京して、近間の私立保育園に

勤める身になった。多くの園児に接する中で、一人どうしても仲間と協調できない児がいた。しばしば乱暴を働く。思案に余った佐島さんは、その男の子と二人だけの時間をもった。その折りに彼女はたまたま故郷の“むかし”を語った。すると相手は耳を傾けてくれる。小さな自信を得た佐島さんは、つぎつぎに昔話を披露した。ちなみに彼女の“むかし”は父方の祖母ハツ女から聴き覚えたものである。ハツ女は昭和52年に92才で没した。

こうして日を重ねるうちに、その児はすっかり安定して、仲間との生活に順応するようになった。園内での社会復帰を果たしたということであろうか。ここにひとつの治癒効果を認めるに私は吝でない。識られるように、シャルロッテ・ルジュモン、高野享子訳『“グリムおばさん”とよばれて』は、敗戦下のドイツにあって、多くの傷病兵相手にグリムを語り歩いた女性の記録である。その一節に次のようにある。「いく人かの病人には、看護だけでなく、“話しかけ”てあげることが、すなわち、メルヒエンを語ってあげることが必要だったのです」(p.76)。

これはやはり、ドイツでのトギ、もしくはトゥギそのものではなかったのだろうか。

(東京都)

1992年度第1回研究例会

1992年度第1回(通算第23回)の研究例会は、92年10月17日午後、中央大学駿河台記念館で開催され、磯沼重治と菊川丞(関西外国語大学)の二氏による研究報告がおこなわれた。司会は荻原真子氏が担当された。以下に掲載するのは、報告者自身による発表内容の要約である。

【菅江真澄における説話伝承の享受 — 浄瑠璃姫伝承を中心に / 磯沼重治】 菅江真澄は天明三年春に旅立ち、没年までに『真澄遊覧記』と総称される紀行や地誌、随筆といった膨大な資料を残した。その旅はどんな目的で、何を著述に残そうとしたのか、まだまだ問題点が多い。菅江真澄は

「なぜ北に向かったか」という問いを、真澄の記述に見える説話伝承に考える。

奥羽への旅立ちの二年前、真澄が「浄瑠璃姫六百回忌追善詩歌連緋序」（『ふてのまゝ』所収）に留めた岡崎地方の浄瑠璃姫伝承の内容を、『浄瑠璃物語』諸本や江戸中・後期の成立とおぼしき数種の寺院縁起、師・植田義方ら編の『三河剛補松』などの地誌と比較分析し、旅の中で採取した義経、姫と侍女、金売吉次、長者譚の重なりに注目し、真澄の説話伝承に対する志向を捉えてみた。

また、「追善詩歌連緋序」や、紀行『委寧能中路』『来目路の橋』『鱒田濃刈寝』などに見える真澄と曹洞宗寺院との密接さを考え併せ、旅の目的・旅遂行上の便宜を、この視点に据えてみた。

【バルトフィンのフォークロア／菊川丞】バルト海沿岸地方に住む非印欧語系のバルトフィン語を話す人々の中で、多数を占めるのはフィンラ

ンド人とエストニア人とである。彼らは共に『カレワラ』『カレヴィポエク』という、フォークロアの対象となる、叙事詩的な作品を伝えており、その共通の語根「カレフ」から、当然のこのように、お互いの密接な関係を問題にしてきたのである。

勿論、共有する素材の処理過程で、たとえばカレヴィポエク（カレフ王の王子）は『カレワラ』の一エピソードであるクーレルヴォとの類似点を指摘されるが、彼らにはさらに『巨人ティヨル』や『昔のバガン』など、エストニアで収集された伝説群と共に、彼らのフォークロアの地平を遙か中央アジアのプロメテ伝説まで見はるかす可能性もある。そもそもが、バルトフィン・プロパーのフォークロアを、フィンランドやエストニアに求めるとはどういうことか。日本での関心とも併せて、研究史的にその概要をたどってみた。

<書く>しぐさの呪術性

川島 秀一

口承文芸の採集において、語り手が採集者の行為のなかで最も眉をひそめる瞬間は、採集者があらたまってテープ・レコーダーのボタンを押すときかもしれない。

あるときは、採集ノートにペンを走らせただけで大声でどなられたことがあった。語り手は民間の祈祷者であり、彼の宗教の内部まで立ち入ったことを質問したせいかもしれないが、「<書く>ことで宗教のことがわかるか」ということが激怒の主な理由であった。

私は彼の宗教の門人ではないのだから、体験的に宗教を学ぶことの価値は知ってはいても、実行できる立場ではなかった。このときほど、なぜ<書く>か、なぜ記録するかということを、語り手に理解してもらうことの難しさと自分の説得力の無さを痛感したことはなかった。

実は、私の語り手であったその祈祷者は文盲であった。しかし、彼が八卦をみるときの主なる行為は、紙の上に筆でやたらに字のようなものを書くことであった。

私が調査しているもう一人の祈祷者も、常に使い古された新聞紙や広告のチラシをそばに置いて依頼者が来ると、その紙を広げて、まっ黒になるまで字のようなものを筆で描いて八卦をみたという。彼も同じく文盲者であった。

もっとも、一時代前には文字が特に生活に必要ななかったわけだから、「文盲者」という言葉を使用することじたい再考を要するわけだが、彼等は<文字>そのものよりも<書く>というしぐさのほうに未知の世界とそれゆえの恐れを感じとったのではないだろうか。

しかし、彼等「八卦おき」と呼ばれる祈祷者は彼等が感じたと思われる<書く>ことの呪術性を自身の宗教生活に引き受け、文字さえも超越してしまったのではないだろうか。

私が地元の新聞に掲載した「昔話」が、ある日、別な語り手から「新聞で読んだ昔話」として語られたとき、<書く>という行為を<文字>とともにじっくりと考えてみたいと思った理由がここにある。（気仙沼市）

【おわびと訂正】前号の学会名英訳案についての水野知昭氏の提言について、以下の主旨の追加訂正がありました。編集担当の手違いで、前号に掲載のさい加筆できなかったことをおわびし、ここに訂正します。

(1)小委員会案の of Japan は「文法的な誤り」としたのを「用法は誤り」と訂正。

(2)B案のThe Japanese Society for Oral-Traditional Arts and Literature の for を of に改める。この場合の学会誌名は従来の表記にならない、Journal of を Studies in に改める(英語としてはどちらの表記も可能)。

《仲間たち》

世間話研究会

山田 巖子

世間話研究会は、1985年6月の日本口承文芸学会の際に、大島広志氏と長野晃子氏の「世間話」から生まれた。当時、(そして今も)対象領域も定義も明らかではない「世間話」という曖昧模糊とした分野の可能性を追究しようということで二人の意見が一致し、研究会を持つことになった。

大島氏は重信幸彦氏に、長野氏は山田に声をかけ、四人で準備会を開くことになった。その際、今は亡き関敬吾先生のお宅で、先生の「世間話」に関するお考えを伺ったことが印象深い。先生は新聞の投書欄の切り抜きを我々に示されて、「このようなものの中にも世間話の研究の対象になるものがある」とおっしゃった。今思えば「口承」という枠では捉えきれない「世間話」の領域に対する御指摘であったと思う。

1985年7月に第一回がスタートし、その後ほぼ一か月に一回のペースで研究会が開かれている。長野晃子氏の御尽力で会場はほぼ毎回東洋大学の白山校舎である。会の当初は先行文献の輪読を盛んに行った。また過去の雑誌に掲載された世間話の文献と、民俗学の分野に限らない世間話に関する研究文献を目録の形で集めた。その成果が1988年3月の『世間話関係文献目録』である。

1989年3月には『世間話研究』第一号を発行、現在までに三号が発行されている。現在は四号を準備中である。主な論文は、「伝説・世間話の交錯と異伝の成立」斎藤純(一号)、「世間話の社会的役割」武田正、「世間話の盛衰」花部英雄、「くまの話」小池淳一(以上、二号)、「ある義賊譚の造形の失敗」武田正、「サイギョウと呼ばれる旅職人」花部英雄(以上、三号)、「世間話定義の指標(1)、(2)」長野晃子(二~三号に連載)。その年ごとの世間話関係文献目録も毎号掲載している。

関西在住のメンバーの増加にともない、1991年と1992年に関西例会を試みている。このような試みは今後も続けていきたいと考えている。

関心のある方々は、下記へご連絡を。

(連絡先。〒270-11 千葉県我孫子市天王台2-11-6 天王台コーポ305 川森博司。電話0471-85-2135)

《外国通信》

「歌謡週刊」発刊七十周年

加藤 千代

中国口承文芸研究の出発点として知られる「歌謡週刊」(北京大学歌謡研究会編、1922~25年、1936~37年)の発刊七十周年を記念して、1992年の12月15日から三日間、北京大学において研究集会が開催された。(全国各地から57名が参加。)

開幕式では、北京師範大学の鍾敬文教授(本年九十歳)をはじめ長老諸氏が、草創期の蔡元培、劉半農、周作人、顧頡剛を追憶し、その業績をたたえ、また会場には当時の貴重な写真や手紙などが展示された。

研究発表と討論は二つの分科会(民間文学・小説班と戯曲・芸能班)で行われ、発表テーマは歌謡に限らず自由であったが、集会の性格上、七十年の研究を総括するものが多く、特に「吳歌」(江南地方の民謡)に関しては、発表二つと採録・研究論文目録の提示があって議論が集中した。

八十年代の初めの長編吳歌(最長は3200行)の発見と採録は、旧来の「漢民族は長編叙事詩を持たない」という通説を覆すものであり、従来の中国文学史を書きなおすためにも、今後、資料の出版促進とともに、研究面を重視すべきことが強調された。また吳歌と対比するように、西北部の甘粛・青海両省の民謡「花儿」の研究発表があり、南北の民謡の比較や音楽理論からの分析などが提議された。

分科会は、歌唱をまじえての質疑応答があるなど、出席者が自由に発言するという、いわば仲間うちの雰囲気のなかで進行した。

今回の主催者は、北京大学のほかには中国俗文学学会(1984年成立)が加わり、そのため地方劇・目連劇・語り物の研究発表とともに、通俗小説とりわけ一種の流行現象として広範な読者をもつ武侠小说(カンフー・アクションもの)とその研究の重要性が討論された。これは現在、民間文学関連雑誌の通俗読み物化の一つの反映であり、時代の流れを感じさせるものであった。

中国の研究集会は、慣例として参加者全員の論文提出が義務づけられる。私も招待を受けて小論「新故事与当代流传故事」を用意し、幸いにも分科会で発表する機会を与えられた。

(北京師範大学に1993年8月末まで留学中)

《こえ》 研究文献データベースの作成を！
徳田 和夫

わたしは、日本中世の説話や物語草子類の研究にたずさわっている。また、その延長として（あるいは、基盤として）、民俗社会での昔話や伝説、あるいは語り物などにも多大な関心を向けてきた。

中世のモノガタリは大半が作者未詳であり、その成立（創作）期も具体的な日時を特定しがたいから、とくにその叙述構造の来歴、主題、モチーフの分析にあたっては、作者の個性を一般化して把握する方法を取らざるをえない。その個性の母体となる集団を想定していくときに、現実には集団によって長期間伝承されて、普遍性や類型性を獲得した口承文芸の論理は強い味方となる。さらに、お伽草子やその他の古文獻には、当時の民間伝承（と覚しきもの）を材料とし、記録したものが多し。これは、昔話の歴史的研究の好材料ともなる。というわけで、文献学を基礎としながらも、やはり口承文芸学には目が離せないのだ。

ところが、いざ両者を対照する段になると、ほとんど難儀することがある。聞けばまた、これは民間伝承に関心を寄せる社会史、思想史、そして心理学などの研究者たちにも共通する悩みでもあるらしい。つまりは、こうだ。昔話・伝説などの

— 受贈書リスト —

飢饉の記憶 武田正 筑波大学 91.4
<口承>研究の「現在」 筑波大学 91.6
BIBLIOGRAPHY ON ISLAMIC ECONOMICS 1991 東京
大学東洋文化研究所内イスラムの都市性事務局
多摩市の民俗（口承文芸）（多摩市史叢書5）92.3
奄美博物館紀要 2号 名瀬市立奄美博物館 92.3
（同館館報第2号・92.3も）
亥の子考 寺岡寿子 福山大学人間科学研究セン
ター紀要 7号別刷 92.3
箱館昔話 4号 函館パレス企画 92.4
グリム童話の誕生 小澤俊夫 朝日選書 92.7
浦安の世間話 米屋陽一 青弓社 92.7
近松研究所紀要 3号 園田学園女子大 92.7

資料の収集の下地は整っている。ところが、それらのタイプ別の研究情報の有無多寡が掌握できず、新見なり異見なりの提出に逡巡してしまうということである。この事態は、口承文芸とその学にとっても不幸この上ないことであろう。

そこで、提案である。とくに口承文芸学が達成してきた豊富な経験をいかし、複数の人々（分野）が協力して、例えば<話型別研究文献目録><テーマ・モチーフ別研究文献目録>を制作してみたら、いかがであろうか。個人一人でやればよい、などと言うなかれ。その個人（専門）レベルではもはや巨大化し複雑化した研究情報に太刀打ちできなくなっているのである。言うまでもなく、目録は研究の現況を体現し、研究はその目録から深化する。これがあって、辞典も存立する。

わたし自身、約四百種のお伽草子作品の個別の研究レベルを把握する必要上から、「作品別研究文献目録」の作成に踏み切り、公開してきた（『お伽草子研究』、『国語国文論集』21号）。たった一人で、民俗学・美術史・社会史・宗教史にまで目を向けるのだから、落ちもあろう。こうしたものは共同作業によって初めて完備する。

諸学の共有財産としての、研究情報の早急のデータ・ベース化が求められている。率先して対処する同志の出現を期待してやまない。

（東京都）

神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 第16集
運搬具 同研究所 92.3
民具マンスリー 25巻3～5号 同上 92.6～8
歴史と民俗 9号 同上 92.8
日本学術会議月報 33巻7・8～10号 92.7～10
日本民話の会通信 102～104号 92.7～11
国立歴史民俗博物館研究報告 38、42～44集
同館蔵資料目録1 福富家文書目録 同上 92.3
月刊歴史手帖 20巻8号 名著出版 92.8
国文学研究資料館報 39号 92.9
会誌 津軽の民話 8号 津軽民話の会 92.10
椿の湖 — 地球環境と民話 日本民話の会 92.11
[編集担当：飯倉・常光・徳田]

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求ください。 入会金1,000円、年会費4,000円。
入会申込書請求・送金先：〒112 東京都文京区白山 5-28-20 東洋大学・東洋学研究所 気付
日本口承文芸学会事務局（TEL.03-3945-7483） 振替：東京 8 - 44834
The Society for Folk-Narrative Research of Japan, c/o The Institute for Asian Studies, Toyo
University, 5-28-20 Hakusan, Bunkyo, Tokyo, 〒112, Japan.

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください